

**教育報告**

## 教養教育院主催国際シンポジウム

## 『『哲学対話教育』実践と応用のための公開シンポジウム』報告

佐藤真基子, Theron Muller, 山岸倫子, 福田翔, 小木曾左枝子

2019年3月17、18日に、富山大学教養教育院主催、国際機構共催、男女共同参画推進室、Wallonie-Bruxelles International（ベルギー）協賛、富山市教育委員会、富山県教育委員会後援のもと、教育手法として世界的に注目されている「哲学対話」をテーマとするシンポジウムとワークショップを黒田講堂において開催した。「哲学対話」の研究者であり実践者である中岡成文氏、Nathalie Frieden氏、Denis Pieret氏による講演のほか、「哲学対話」を実際に行うワークショップには、学内のみならず全国各地から参加者が集まり、全体会議の時間には活発な議論が交わされた。本報告では、この企画の目的、開催までの準備状況、当日の概要、得られた成果を記録し、本学における教養教育に今後どのように活かしていくかについて、展望を示す。

**1. 企画の目的**

「哲学対話」は、グローバル化の進む現代社会において、他者を理解し、自己を表現して、創造的に問題解決に取り組む能力を身に付けるための教育手法として、世界的に注目されている。それは、表面的な情報交換力にとどまらない「対話力」の育成が、真のグローバル人材の形成に不可欠なものとみなされているからである。「対話力の育成」は、富山大学教養教育院のカリキュラムポリシーにおいても、各系の学修内容としてうたわれており、また、英語をはじめとする外国語教育におけるコミュニケーション力、グローバル人材の育成は、教養教育において重要な位置を占めている。そこで、この教育手法について国内外の専門家から学び、教養教育の実践に活かしていく可能性を検討する機会を企図した。

「哲学対話」はまた、高等教育の教養教育においてだけでなく、幼児教育から生涯学習、医療の現場や各種更生施設、一般企業の社員研修にも応用されている。それゆえ、この企画は、学内の教職員

と学生のみならず、広く一般を対象とするシンポジウムとして開催することがふさわしいと考えた。それによって、地域の諸機関の人材育成に貢献するとともに、富山大学の教養教育の取り組みの意義を社会に発信することを目指した。

## 2. 開催までの準備状況

【実行委員会】 企画の運営にあたり、富山大学教養教育院の佐藤真基子を実行委員長、同教養教育院の Gerald Talandis Jr.、Theron Muller、山岸倫子、福田翔、同国際機構の小木曾左枝子（名前は現在までの富山大学での勤続年数順）を実行委員とする実行委員会を立ち上げた。そして、この実行委員会による企画として 2018 年度の学長裁量経費に応募し、2018 年 8 月に採択された。

【経費】 学長裁量経費として得られた資金は企画時に予定していた予算の 15%であったため、当初、企画の遂行は困難だと思われた。だが、男女共同参画推進室（市田露子 富山大学学長補佐・男女共同参画推進室長）にご協賛いただけることとなり、実施に向けて計画を進めることが可能になった。その後、男女共同参画推進室、国際機構、教養教育院からの援助、教員からの寄付、また、外国人講師の一人は本国の機関から渡航費の援助を得た。さらに、広報のためのポスターデザイン、ウェブサイトの作成と管理、講演者の英語原稿の添削、当日の同時通訳など、本来なら業者に委託すべき作業は、実行委員の他、学内の教職員によるボランティアによって行われた。当日の会場設営、管理、運営も、実行委員の他、教養教育院の谷井一郎教員、名執基樹教員、谷口美樹教員、水野真理子教員、国際機構の田中信之教員、教養教育院事務職員など、多くの教職員の協力のもとでなされた。これらの協力がなくては、このシンポジウムは実現しなかった。

【企画内容】 企画の実施にあたり、シンポジウムにおいては、一般社団法人哲学相談おんころ代表理事である元大阪大学教授の中岡成文氏、世界各国で哲学教授法を指導し、ユネスコ主催の世界哲学デーのイベントでも哲学対話に関するシンポジウムとワークショップを担っている、元フリーブル大学（スイス）の Nathalie Frieden 氏、ベルギーとフランスを中心に活動を行う特定非営利活動法人 PhiloCité のオーガナイザーであるリエージュ大学（ベルギー）の Denis Pieret 氏を講師として招聘することとした。また、講師による講演だけでなく、哲学対話の実践を参加者に経験してもらうためのワークショップを実施するにあたり、哲学対話の英語教育への応用を実施、研究されてきた、広島学院教諭の松村康平氏にも講師として来ていただくことが決まった。

さらに、現在近隣地域で行われている、哲学対話に関する具体的な活動を知る機会として、ポスター発表の場を設けることにした。募集の結果、石川県西田幾多郎記念哲学館（井上智恵子氏、中嶋優太氏）にご発表いただくことになった。

準備期間中、講師とは緊密に連絡を取り合った。講演とワークショップの内容についても、予想される参加者の期待に応えるものになるよう、メールやスカイプで議論し、講師同士も、相互の連携がうまくいくよう繰り返し協議してくださった。さらに、いずれの講師も英語を母国語とするものでは

なかったが、事前に英語でも原稿と資料を用意していただき、実行委員はその翻訳を作成した。

【広報】 広報のためのちらしは、日本語話者と英語話者、本学学生向けの3種類を用意した。日英両方を表記するポスターも別に作成した。デザイン、校正はすべて実行委員が担った。これらは、学内の他、県内の小・中・高・大学、図書館等の教育機関、近隣県の大学、その他、関連分野の研究者がいる全国の大学、研究機関に配布した。また、教養教育院の大橋隼人教員の協力を得てウェブサイト (<http://www.las.u-toyama.ac.jp/event/pd2019/>) を作成し、学会等のメーリングリストやウェブサイトで広報していただいた。さらに大学ホームページのプレスリリースに情報を掲載し、NHK 富山放送局のラジオ放送でもご紹介いただいた。

広報の具体的な方法は多岐にわたるが、マニュアルがあるわけではなかった。今回の企画においては、以前に国際機構主催の国際シンポジウム運営を経験した小木曾実行委員と国際部留学支援課事務職員の助言と協力によって、かろうじて複数の仕方で広報を行うことができた。今後こうした企画を社会に発信していくためには、運営のノウハウを組織として共有していくことが有益であろう。



宣伝用ポスター

### 3. シンポジウム講演・ポスター発表概要

【講演 1】 Denis Pieret “Looking back - Ten Years of Experimentation of Philosophy in Society. Influences, Goals and Outcomes” (「社会の中で哲学を実験した 10 年をふり返って—影響、目標、成果」)

Pieret 氏は始めに、2006 年にリエージュ大学哲学科の研究者と教授らによって設立された非営利団体 PhiloCité の活動を紹介した。PhiloCité は設立以来、学術的哲学と実践哲学の間の連携を図りながら、その活動は今日、社会からの要請を得て、ユネスコの活動やヘルスケアに従事する職業人への支援と指導にも展開している。Pieret 氏はさらに、この PhiloCité の活動を支えている活動の原則、「哲学的問い」とは何であり、「対話」において何が生じることが目指されるかを、John Dewey や Matthew Lipman の思想に言及しながら述べた。そして、学びのプロセスとしての「対話」が実現するために、PhiloCité がそのトレーニング・セッションで採用している具体的なメソッドを、その背景にある思想とともに説明した。

【講演 2】 中岡成文「哲学対話にできること—医療と社会共創を中心に」(“Possibilities of Philosophical Dialogue - in Medical Setting and Societal Co-creation”)

中岡氏は始めに、1998年に大阪大学で「臨床哲学」が立ち上がり、欧米の哲学プラクティスとの交流をもちながら、小中高校の教育や、医療の現場においてその取り組みが開始されたこと、その活動は後に、様々な科学技術をめぐる専門家と市民の双方向的な対話や、司法の現場における被害者と加害者の対話へ、すなわち「社会共創」のレベルへと展開していったことを説明した。さらに、現在中岡氏が取り組む数々の活動の中でも、がんや神経難病の患者・家族との対話の実践から、具体的な経験を紹介した上で、対話を通して生じうることは何か、当事者が対話を通して社会をいかに変えうるか、信念体験の「前提」を協同で検討するものとしての「哲学対話」について論じた。また、米軍基地をめぐる、英語による高校生との対話の実践を通して見出された知見についても示された。講演の最後には、聴衆がすぐにもアクセスしうる「哲学対話」関連のウェブサイトや資料についても情報が提供された。

【講演 3】 Nathalie Frieden “How Philosophical Dialogue Changed the Way of Teaching. An Example: The Didactics of Language Teaching”（「哲学対話は教育法をどのように変えたか—言語教育の教授法を例として」）

Frieden氏は始めに、Orality（話法）をキーワードとして提示した。20世紀後半以降に発展した、教育手法としての「哲学対話」は、話法の奥深さ、その重要性を見出すことにつながった。対話の発展は、思考の発展であり、その恩恵を受けるのに、大人と子供の別はない。相手が話していることを「本当に聞く」とき、人は相手が考えているということを見出す。哲学対話は、知識を伝授する教授法から、創造的知性、ユーモア、クリティカル・シンキング、聞くこと、解釈すること、観察すること等の能力を伸ばす教授法への転換をもたらしたのである。さらに Frieden氏は、こうした能力の具体的な訓練法について言及した上で、自身が取り組む、スイスにおける移住者の言語学習クラスでの具体的な事例を紹介し、哲学対話が、他者性の確認と、誰もが耳を傾けられることを可能にする市民的な場を作り出し、異文化を理解し言語を学ぼうとする意識を育むことを示した。

【ポスター発表】 石川県西田幾多郎哲学記念館「博学連携としての『哲学対話』の実践—石川県西田幾多郎記念哲学館の『共通道徳』の取り組み—」

同記念哲学館は、地元の小学5年生と中学2年生を対象に、道徳の授業の一環で哲学対話を行っている。発表では、博物館が学校教育に関わる博学連携の一例として、哲学対話の導入で生まれた影響や課題について報告された。

#### 4. ワークショップ概要

開催第一日目の午後と、翌日の午前に、ワークショップを行った。はじめに松村氏により、哲学対話を行う上での基本的なルール説明も含むご講義をいただいた。それをふまえて、参加者は2つのグループに分かれ、Pierret氏とFrieden氏がそれぞれのグループのファシリテーターとなって哲学対話を行った。前半のシンポジウムに引き続き、富山大学人文学部の中島淑恵教員、澤田哲生教員が仏語同

時通訳としてつき、また、参加者の日本語による発言を英語で通訳する教員も各グループに加わることで、言語による意思疎通の困難がないよう配慮された。

対話の実践において、ファシリテーターは各日異なるテーマ、手法を取り入れた。参加者は、実践を通して哲学対話の手法を学び、それによって生じる対話のダイナミズムを体験した。各日約1時間の対話の実践の後、4人の講師と参加者全員で全体会議を行った。全体会議では、ワークショップで行った対話をふりかえって考えたことが共有されたほか、こういう場合はどうしたらよいのかといった具体的な質問もなされ、講師陣が回答した。シンポジウム前半の講演内容に関する質問や、講師が別の講師に質問することでさらに議論が深まっていく場面もあった。ふだん哲学対話の実践に取り組まれている参加者から、その経験に基づく意見も出されるなど、議論は活況を呈した。

## 5. 成果

参加者は、各種学校の教員や医療関係者、学生、一般等と幅広く、年齢層も広がった。回収したアンケートの、「シンポジウムは期待通りでしたか」という質問に対して、否定的な回答が一つもなかった。コメント欄には、「思考が広がった」、「新しい発見がたくさんあった」、「新鮮で感銘を受けた」という感想のほか、今後の生活や仕事でどのように活かしていきたいかについて具体的な考えを記されたものもあった。「地域の諸機関の人材育成に貢献する」という本企画の目的は達成されたと思われる。また、今回海外から招聘した講師二人は、富山大学への招聘をきっかけに、大阪大学でも講演を行うことになった。哲学対話に関する国内の研究動向において、ヨーロッパからの研究者招聘は珍しく、画期的な機会を今回の企画は作り出せた。

他方で、アンケートのコメント欄には、「全国規模の企画なのだからもっと周知するべきだった」、「学外の参加者が多い一方で、学内教員の参加者が少ないのが残念だ」という指摘もあった。指摘のとおり、広報についてはより早い時期に、より効果的な方法で行うべきであった。使用できる予算が確定するのが遅かったこと、教員が他の業務の合間に作業せざるを得なかったこと、広報手段についての事前知識が少なかったことも影響した。このことは、今後組織として同様の企画を実施する際に改善するべき点であろう。しかし、参加はできなかったが広報を通して関心を持ったという声を、開催後も多くいただいた。広報活動を通して、富山大学教養教育院の取り組みを広く社会に発信することはできたのではないかと思う。

## 6. 教養教育における活用可能性

今日、急速にグローバル化する社会において活躍する人材の育成を目指して、大学の教養教育においても教育法そのものの見直しが迫られている。今回講演者によって示されたような「哲学対話」がもつ可能性、すなわち、他者の話を聞き、理解を深め、考えなおし、先入観を超えてあらたな視点でものごとを捉え直し、他者と協同する力を伸ばしていく可能性は、こうした社会の要請に直接応え得るものである。実際、シンポジウムとワークショップを通して提供された、具体的なメソッドやファシリテーターとしてのあり方、対話の心得は、教員においては、様々な授業に活かしうるし、将来、

医療や教育、福祉の現場も含む、様々な社会の場で活躍する学生たちにとっても役立つ筈である。アンケートで参加者にいただいたコメントには、今後学内で、「哲学対話」についての教員や学生向けセミナーを開催してはどうかという案も挙げられていた。教養教育院のカリキュラムポリシーを実行に結びつけるための具体的な手法として、今回の企画で得られた知見を活かしていくことが可能であろう。

[著者（五十音順）]

小木曾左枝子

立命館大学グローバル教養学部（2019年3月末まで富山大学国際機構）

佐藤真基子

富山大学教養教育院

福田翔

富山大学教養教育院

Theron Muller

富山大学教養教育院

山岸倫子

富山大学教養教育院